

教会—キリストに聴く所

[使徒言行録 15 章 1～12 節]

ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と兄弟たちに教えていた。それで、パウロやバルナバとその人たちとの間に、激しい意見の対立と論争が生じた。この件について使徒や長老たちと協議するために、パウロとバルナバ、そのほか数名の者がエルサレムへ上ることに決まった。さて、一行は教会の人々から送り出されて、フェニキアとサマリア地方を通り、道すがら、兄弟たちに異邦人が改宗した次第を詳しく伝え、皆を大いに喜ばせた。エルサレムに到着すると、彼らは教会の人々、使徒たち、長老たちに歓迎され、神が自分たちと共にいて行われたことを、ことごとく報告した。ところが、ファリサイ派から信者になった人が数名立って、「異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じるべきだ」と言った。そこで、使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。議論を重ねた後、ペトロが立って彼らに言った。「兄弟たち、ご存じのとおり、ずっと以前に、神はあなたがたの間でわたしをお選びになりました。それは、異邦人が、わたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようになるためです。人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。また、彼らの心を信仰によって清め、わたしたちと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした。それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖もわたしたちも負いきれなかった轡を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」すると全会衆は静かになり、バルナバとパウロが、自分たちを通して神が異邦人の間で行われた、あらゆるしるしと不思議な業について話すのを聞いていた。

[1] 使徒言行録—教会の初めの鼓動

5月から使徒言行録をご一緒に読んでいますけれども、二週間前はサウロの回心、先週はアンティオケ教会のバルナバの働きを見ましたけれども、使徒言行録、なかなか面白いですね。キリスト教会の源流、或いは初めの鼓動と言いますか、それが書かれています。当然ですけれども、これは造り話ではありません。むしろ、人の思いを超えた、神様の現実・リアリティーが綴られているということ強く思われます。こういう所を、私たちの教会と重ね合わせるようにして読んでいくと、教会の歩みに背中を押されると言うか、励まされるものを感じます。

[2] 教会が乗り越えていったもの

今日の箇所も、キリスト教会の歴史にとって、それが現在にも繋がっていく画期的な出来事が記されています。15章のこの箇所、新共同訳聖書の小見出しには「エルサレムの使徒会議」と付けられています。ユダヤのエルサレムで、**生粋のユダヤ人キリスト者たちと、周りの諸外国で導かれてキリスト者になった者たち**の代表者が集まって、ある重要なテーマについて話し合ったというのです。そこで確認したことは、今の世界中のキリストの教会の**基礎**になっています。**土台**になっていると言っても良いことです。一言で言ってしまえば、私たちの救いは、**ただイエスを信じる信仰によるのだ**という「**信仰義認**」であるということ、そこにはユダヤ人も外国人の区別もないのだということが公に確認されたということです。神様の偉大な業は、私たちのちっぽけな理解を超えている。それこそが**教会の柱、命綱**だということです。それが一致した見解になった。大きな出来事です。

そのためにどうしても乗り越えていかなければならないことがありました。旧約聖書のしきたりのことです。「**割礼**」という儀式。これが神様の契約の民のしるしでした。ユダヤ民族というのは、もともと信仰共同体でありました。そのしるしの一つが割礼を受けるということでした。イエス様も、またイエス様の直接の弟子たちもユダヤ人たちでした。割礼を受けています。エルサレム教会の者たちもその弟子たちとの繋がりから生まれた教会です。ユダヤ人たちはもう代々「割礼」ということを守り続けてきたのです。信仰共同体の一員になるとはそういうことだと。ですから、外国人が洗礼を受けるのは喜ばしいことであるのだけれども、契約の民に加わるのであるならば、そのしるしである割礼を受けなければならないとユダヤ人キリスト者たち（全員ではないでしょうけれども）は考えていて、それをバルナバやパウロに伝えたというのです。そこで双方の間に激しい論争が生じたと2節に書かれてあります。

今私たちはこういう所を読むと、こういう時代もあったのかと傍観的にとらえてしまうと思います。けれどもどうなのでしょう。これを「**プライド**」の問題、「**誇り**」の問題として見ると根深いものがあると思います。ユダヤ人は選民意識が強いと言われることがありますけれども、それはユダヤ人だけの問題なのかどうかということです。アメリカ人どうか。フランス人どうか。イタリア人は？中国人は？そして日本人は？…どの国の人も、自分の国が一番と思っているところがあるのではないのでしょうか。それはそこに住んでいるのですからある意味当然ですけれども、**自分の国ファースト**という感覚ですね。これは私たちの中にもある気が致します。私たちはあの国よりは優れているとどこかで思いたい。**愛国**

心の芽は誰もが持っているものでしょう。それ自体悪いものではないと思います。しかし、例えば今話題になっている**入管法の改正案**で、日本は本当に外国人の難民を受け入れていないという問題が浮き彫りになっています（他の国に比して極端に少ない）が、これはどこか外国人特にアジア人や中東の人を見下している所があるように思います。難民申請を3回して認められなければ強制送還させるという法案ですね。折しも今年**オリンピック**が開催されようとしています。日本人が活躍すると嬉しい気持ち、私もあります。でも、時々それは何なのだろうかと思えます。日本人がナンバーワンだ、勝利したという可視化がそこにあり、**ナショナリズム**がくすぐられるのですね。ナショナリズムというのは、自分（たち）こそが強い、偉い、一位だという「プライド」に他ならないと思います。そしてそれは異文化、異質なものを叩く様な事とも裏腹かもしれません。

使徒言行録の15章ですが、エルサレムのキリスト者たちは、新参者はまず私たちユダヤ人のしきたりを守れと言ったのです。15章の1節と5節にそれがありますね。そして6節。「そこで、使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。」これが**使徒会議、エルサレム会議**です。この時立ち上がったのがあの使徒**ペトロ**です。10章で、あのイタリア隊の百人隊長**コルネリオ**が主に導かれたことを通して、彼は、自分はユダヤ人だけれど、外国人にも主は等しく聖霊を注ぐのだ、**イエス・キリストは全ての人の主なのだ**という確信を持っていましたからそのことを語ったのです。7節からです。—「兄弟たち、ご存じのとおり、ずっと以前に、神はあなたがたの間でわたしをお選びになりました。それは、異邦人が、わたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようになるためです。人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。また、彼らの心を信仰によって清め、わたしたちと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした。それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖もわたしたちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」

〔3〕 礼拝にはイエス様の命が注がれている

この後の描写がいいですね。「すると全会衆は静かになり、バルナバとパウロが、自分たちを通して神が異邦人の間で行われた、あらゆるしるしと不思議な業について話すのを聞いていた」。全会衆は言葉を失ってしまったというのです。ペトロの言葉、またパウロとバルナバの証言が語られ、もはや口を挟むことが出来なくなりました。ここは大事です。これは私は、**主イエス・キリストの出来事**に彼らは打たれたということなのだと思うのです。皆さん、思い起こしてください。主イエスは、

あの十戒にもある、一切の労働をしてはならない**安息日にも人を癒されました**。何
度もです。更に**罪人や徴税人たちと食事を共にされました**。姦淫の罪で捕えられた
女性を**断罪することなく、赦されました**。イエス様にとって、それらは命がけでした。
けれどもそれをしました。それは、これが父なる神のみ心であったからです。そ
のみ心とは、「**神様が私たちと共にいます**」ということです。「**あなたの罪は赦され
た**」ということです。人はどんなに頑張っても自分で自分を救うことなど出来ま
せん。自分の行いや律法の遵守では、自己満足に陥るか、自分はダメだという、
罪の自覚が生じるのみです。そして律法主義は他者を排除し、人を孤独にします。
イエス・キリストはそこから私たちを救い出すために来て下さったのです。そし
て、**私たち自己中心な罪人のためにその命を注いで下さったのです！**

パウロは、ガラテヤの信徒への手紙の中で「**ユダヤ人もギリシア人も、男も女もな
い。キリストにあって一つだ**」と言いました。(3:28)。これこそがこの使徒会議で公
になった教会の言葉です。**何の差別も排除もない**。本当の意味で「**共に生きる**」こと
がここから始まります。これはスローガンでなく、キリストの血が注がれている
のですね。

先日頂いた**藤澤一清先生**の説教集の中に素晴らしいお証しがありました。病
気になられてからのエッセーの言葉です。先生、福音のために命を張っておられ
ると思いました。今日の週報に引用させて頂きました。その中にこう書いておら
れます。—(炭鉱町の宇美伝道所に) <一人のおじさんがやってきて「外に出ろ！
おまえ、この間の日曜日にしゃべったことに責任を取れるのか」と叫ぶのです。

「信じれば救われる」と私は説教しました。「おまえは責任を取れるのか。俺は
包丁を持っているぞ」と言うのです。言うことだけ言ったら、帰って行きました
が、そのとき私は思いました。「自分の言葉で語って、刺されるのだったら、納
得がいく。でも人の言葉を借りて、キリスト教会の言葉を借りて、傷つけられ
たら、あわんなあ」と。人が語った説教の言葉ではなく、自分の言葉で語ろうと思
ったのです。自分が語ったことで殺されても、全く悔いはない。それ以後、ずっ
とそのようにしてきました。岐阜時代に一度、右翼から脅されて、「おまえを殺
す」と言われたことがあります。その事務所に行き、傷つけられると思いた
が、怖くはありませんでした。脅されたのは、自分の言葉のためだったからです。

「岐阜教会の礼拝を潰す」と言われました。キリスト教のいのちは礼拝です。礼
拝は神さまと僕らの出会いです。それを潰されるくらいなら、自分を殺せ、と思
いました。> —藤澤先生は今私たちに語っておられると思います。「**礼拝は神
さまと僕らの出会いだ**」と。このように礼拝を捧げられるためにはイエス様の命が
注がれているのですね。私たちもそれに応える礼拝を捧げたいと思います。

お祈り致します。